

新富町所在

ゆのみや  
湯之宮遺跡

県道川床日向新富停車場線（湯之宮工区）道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2023

宮崎県埋蔵文化財センター

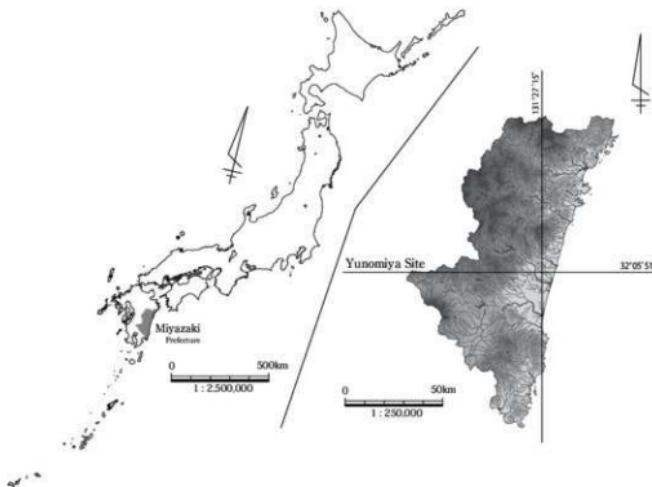


新富町所在

ゆのみや  
湯之宮遺跡

Yunomiya Site

県道川床日向新富停車場線（湯之宮工区）道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書





## 序

それぞれの地域に根ざした歴史的遺産である埋蔵文化財は、我が国の歴史と文化の正しい理解の基礎をなすものです。一方、開発によって失われる側面もあるため、宮崎県教育委員会では、地域開発と調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでいます。

宮崎県埋蔵文化財センターでは、県道川床日向新富停車場線の一部となる湯之宮工区道路改良工事に伴い、令和3年度に新富町大字新田字湯ノ宮に所在する湯之宮遺跡の発掘調査を実施しました。本書は、その発掘調査記録を掲載した報告書です。

湯之宮遺跡では、弥生時代後期の竪穴建物跡や、中世の遺物が出土した火廻跡など人間生活の痕跡を見出すことができ、当時のこの地における人々の営みの一部を明らかにすることができました。ここに報告する内容は、湯之宮地域をはじめとする新富町の歴史を解明する上で、貴重なものになるものと考えられます。

また、本書や出土遺物等が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場において活用され、また埋蔵文化財保護に対する理解の一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関、地元の方々に心より厚くお礼申し上げます。

令和5年2月

宮崎県埋蔵文化財センター所長

## 例　　言

- 1 本書は、県道川床日向新富停車場線（湯之宮工区）道路改良工事に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県児湯郡新富町大字新田字湯ノ宮に所在する湯之宮遺跡の発掘報告書である。
- 2 発掘調査は高鍋土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。調査は令和3年7月27日から令和3年10月13日までの45日間にわたり実施した。
- 3 発掘調査は、伊東浩二、平井祥哉が担当し、加藤真理子及び新富町教育委員会桑村壮雄氏の協力を得た。現地調査における図面作成及び写真撮影は調査担当者が分担して行った。
- 4 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務については、伊東が整理作業員の補助を得て行った。
- 5 空中写真撮影、自然科学分析（放射性炭素年代測定、樹種同定）は、次の業者に委託した。
  - ・ 空中写真撮影 有限会社 スカイサーベイ九州
  - ・ 自然科学分析 株式会社 古環境研究センター
- 6 本書で使用した第1図「湯之宮遺跡周辺の主要な遺跡分布図」は、国土地理院発行の電子地形図2万5000分の1をもとに作成した。
- 7 本書で使用した土層断面及び遺物の色調等は、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財團法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帖』を参考にした。
- 8 本書中の図面の方位は、座標北（G.N.）を示している。標高は海拔絶対高である。また、全体図で使用した座標は世界測地系（WGS84）九州第Ⅱ系に準拠している。
- 9 本書の執筆は、伊東が行い、東憲章がこれを補助した。なお、IV章の報告記載内容は、古環境研究センターへの委託成果品を伊東が整理・編集したものである。
- 10 土器の分類は東、須恵器及び陶磁器の分類は塙田孝博、石器の分類は藤木聰、石器石材の同定については赤崎広志氏（宮崎県総合博物館）による助言を得て伊東が行った。
- 11 出土遺物写真撮影は、東が行い、伊東が補助した。
- 12 出土遺物・実測図・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 13 本書で使用した造構略記号は以下のとおりである。

SA : 竪穴建物跡	SC : 土坑	SE : 溝状造構	SH : 単独の小穴
SR : 火焚跡			

## 本文目次

### 第Ⅰ章はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 発掘調査の方法と経過	2

### 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

### 第Ⅲ章 調査の成果

第1節 基本層序	7
第2節 遺構及び出土遺物の概要	10
第3節 中世の遺構と遺物	10
第4節 弥生時代の遺構と遺物	12
第5節 時期不明の遺構	16
第6節 包含層出土遺物	18

### 第Ⅳ章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の概要	23
第2節 放射性炭素年代測定	23
第3節 樹種同定	25

### 第Ⅴ章 総括

第1節 遺構について	28
第2節 遺物について	28
第3節 自然科学分析について	29
第4節 結語	29

## 挿図目次

第1図 湯之宮遺跡周辺の主要な遺跡分布図	5	第13図 1号堅穴建物跡出土遺物実測図②	15
第2図 周辺地形図と遺跡分布図	6	第14図 1号土坑（SC 1）実測図	16
第3図 調査区全体図	6	第15図 2号土坑（SC 2）実測図	16
第4図 調査区土壟断面図	7	第16図 7号溝状構（SE 7）実測図	17
第5図 調査区（A区）全体図	8	第17図 時期不明の遺構に伴う遺物	18
第6図 調査区（B区）全体図	9	第18図 包含層出土遺物①	20
第7図 1号火除跡（SR 1）実測図	11	第19図 包含層出土遺物②	21
第8図 2号火除跡（SR 2）実測図	11	第20図 曆年較正結果①	24
第9図 1号火除跡出土遺物	11	第21図 曆年較正結果②	25
第10図 1号堅穴建物跡（SA 1）実測図	12	第22図 曆年較正年代マルチプロット図	25
第11図 1号堅穴建物跡（SA 1）遺物分布図	13		
第12図 1号堅穴建物跡出土遺物実測図①	14		

## 表目次

第1表 土器観察表	22
第2表 石器観察表	22
第3表 金属製品観察表	22
第4表 放射性炭素年代測定結果	24
第5表 樹種同定結果	27

## 図版目次

図版1 調査区全景（東から）	調査区全景（西から）
図版2 1号堅穴建物跡完掘状況（南西から）	1号堅穴建物跡北側完掘状況（南から）
1号堅穴建物跡東側遺物検出状況（西から）	1号堅穴建物跡南側中央部（北から）
1号堅穴建物跡遺物出土状況（東から）	
図版3 B区中央部遺構分布状況（東から・手前SR 2）	1号火除跡検出状況（南西から）
2号火除跡検出状況（北から）	作業風景
現地説明会	
図版4 SR 1出土遺物	SA 1出土遺物①～③
図版5 時期不明の遺構に伴う遺物	包含層出土遺物①～④

## 第Ⅰ章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯

宮崎県教育庁文化財課（以下、「文化財課」という。）では、毎年、関係機関に対して開発事業の照会を実施しており、高鍋土木事務所による県道川床日向新富停車場線（湯之宮工区）の道路改良計画について道路建設課から回答があった。同工区内には、周知の埋蔵文化財包蔵地2箇所（湯之宮遺跡・新田瀬之口遺跡）が存在し、隣接する国指定天然記念物「湯之宮座論梅」に関する中世以降の古文書等も残されていることから、文化財課では、高鍋土木事務所による用地買取等の事業進捗に合わせ、令和2年度に3回の試掘・確認調査を実施した。

1回目の調査（令和2年12月9日）は、湯之宮遺跡のうち、湯之宮工区の東端側の畠地及び「湯之宮座論梅」西側の宅地跡で実施し、畠地部分の表土中から中世土師器の細片等が出土したほか、宅地跡で表土直下に柱穴等が確認された。2回目の調査（令和3年2月9日）は、新田瀬之口遺跡のうち、湯之宮工区の西端の畠地・宅地跡や工区中央付近の宅地跡等で実施し、表土中から陶磁器等が出土したもの、遺構は検出されなかった。3回目の調査（令和3年2月16日）は、1回目調査で柱穴等が確認された箇所の西隣の畠地で実施し、溝状遺構や柱穴のほか、中世陶磁器・瓦質土器・銭貨等を含む包含層が確認された。

試掘・確認調査の結果を受け、高鍋土木事務所と文化財課、県埋蔵文化財センターの三者で遺跡の取扱いについて協議を行い、やむを得ず工事の影響を受ける湯之宮遺跡の一部（1回目調査の宅地跡及び3回目調査の範囲）について発掘調査を行い、記録保存の措置をとることとなった。

### 第2節 調査の組織

湯之宮遺跡における発掘調査組織は下記の体制で実施した。

【調査主体】宮崎県教育委員会

【事業調整】宮崎県教育庁文化財課

埋蔵文化財担当リーダー	飯田 博之	(令和2年度)
	松林 豊樹	(令和3～令和4年度)
埋蔵文化財担当	藤本 聰	(令和2年度)
	沖野 誠	(令和3～令和4年度)

【調査機関】宮崎県埋蔵文化財センター

所長	菊村 祐司	(令和3～令和4年度12月まで)
	吉本 正典	(令和4年度2月から)
副所長	赤崎 広志	(令和3年度)
	片伯部 真一	(令和4年度：兼総務課長)
専門主幹	谷口 武範	(令和3～令和4年度)
総務課長	鈴木 勝代	(令和3年度)
総務課担当リーダー	阿波野 ゆかり	(令和3～令和4年度)
調査課長	飯田 博之	(令和3年度)
	東 憲章	(令和4年度)
調査課調査第二担当リーダー	東 憲章	(令和3年度)
	平井 祥蔵	(令和4年度)
調査課調査第二担当	伊東 浩二	(調査担当、整理・報告書作成)
調査課調査第一担当	平井 祥蔵	(調査担当)

### 第3節 発掘調査の方法と経過

#### 1 発掘調査の方法

遺構の作図に関しては、縮尺1/10もしくは1/20での個別図作成を基本とし、平面図については株式会社CUBIC製の「遺構くん」で実測、作図・記録したが、竪穴建物跡や火跡、遺物出土状況等を詳しく記録するものについては調査員が実測、作図を行った。また、写真記録に関しては、フルサイズのデジタルカメラを使用した。さらに、業者委託による空中写真撮影は、アカホヤ上面での遺構完掘時に1回実施した。

#### 2 発掘調査の経過

湯之宮遺跡の発掘調査は、380m<sup>2</sup>を対象に、令和3年7月27日から令和3年10月13日までの45日間で実施した。調査区は、県道川床日向新富停車場線に隣接する西から東に向かう狭長な範囲であり、道路側へのフェンス及び仮設ガードレールの設置、排土処理の方法等、安全面での配慮が必要であった。排土置き場の確保等の理由から、調査区を東側と西側に分けて調査した。なお便宜上、東側をA区、西側をB区と設定した。各調査区における発掘調査経過の概要については、下記の通りである。

R3.7.27～7.30	重機による表土除去、ガードレール・ガードフェンスの設置
8.8～8.5	発掘作業員雇用開始、A区遺物包含層掘削・溝状遺構・小穴群検出、掘削、実測
8.6	台風対策
8.10	A区溝状遺構・小穴群検出、掘削、実測
8.11	ガードレール・ガードフェンス移設
8.16～8.20	B区溝状遺構・小穴群掘削及び実測
8.23～8.30	B区弥生時代後期の遺構、火跡・溝状遺構・小穴群検出
9.1～9.10	B区弥生時代後期の遺構、火跡・溝状遺構・小穴群掘削及び実測
9.13	新富町議会議員・新富町教育委員会視察、台風対策
9.15～9.22	B区弥生時代後期の遺構、火跡・溝状遺構・小穴群実測
9.24	アカホヤ面にて空中写真撮影、瓦礫産廃除去
9.24～9.29	A区・B区下層確認
9.30	上新田学園6年生現地説明会
10.1～10.8	B区弥生時代後期の遺構掘削及び実測、発掘作業員雇用終了
10.11～10.13	重機による埋め戻し、ガードレール・ガードフェンスの撤去、調査終了

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

湯之宮遺跡は、宮崎県児湯郡新富町大字新田字湯ノ宮に所在する。新富町は宮崎平野北部の一角を占める児湯郡に属し、九州山地を源流とする一つ瀬川が南流から東流へと大きく湾曲する流域左岸の沖積平野と、標高70~90mの台地面にかけて町域を有する。町域の大きな割合を占める洪積台地は、宮崎平野に広がる平坦面の顕著な段丘地形となっており、地形区分でいう茶臼原面（海抜約120m）、三財原面（海抜約90m）、新田原面（海抜約70m）の三つに分けられる。

今回調査を実施した湯之宮遺跡は、新富町中心部から北西に約4.5kmの、新田原面を大きく東西に開析する鬼付女川沿いに発達した河岸段丘面標高約60mに立地する。周辺には、国指定天然記念物「湯之宮座論梅」があり、その南側には近世に実知寺のあった「湯之宮神社」が鎮座している。

### 第2節 歴史的環境

湯之宮遺跡周辺では、東九州自動車道延岡～清武間の発掘調査が平成11年度から始まった。それらの調査において旧石器時代から中世の遺跡の存在が明らかとなっている。また、調査区近辺においては弥生時代から中世においての遺跡が分布している。

#### 旧石器時代

湯之宮遺跡の西に東九州自動車道が南北に伸びている。その建設に伴う発掘調査において、新富町内では後期旧石器時代の遺跡がAT下位で12箇所、AT上位で14箇所確認されている。AT下位では、音明寺第1遺跡や東畦原第3遺跡などで疊群や石器が確認されている。また、AT上位では東畦原第1遺跡において、横長の剥片をとる瀬戸内技法によって作られた国府型ナイフ形石器が出土している。

#### 縄文時代

湯之宮遺跡周辺では、下川床遺跡から縄文時代の石錐が出土している。早期の遺物として、音明寺第1遺跡では尖底土器が、西畦原第2遺跡では石礫や石核が出土している。最大長2.0~2.5cm程度で、石材としては桑ノ木津留産や阿蘇小国産と思われる黒曜石やチャートが用いられており、当時の交流の様子の一端を見ることができる。また、深さが2mを超す陥し穴状遺構も検出されている。藤山第1遺跡では、比較的大きな石を使用した径約3.0mの早期の集石遺構が検出された。

#### 弥生時代

湯之宮遺跡周辺では、弥生時代中期～後期前半に集落形成が始まる宮ノ東遺跡（西都市）において、38軒の竪穴建物跡が検出された。在地の中溝式壇と共に瀬戸内系の凹線文を有する壺や、脚部に矢羽根透かしを有する高壺、太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧などの大陸系磨製石器も出土している。これらの瀬戸内系土器の多くは愛媛県松山市を中心とした伊予地域や備讃地域からの搬入品で、特に壺・高壺などが多く県内で見つかっている。宮ノ東北側に位置する新富町紙園原・春日・新田原遺跡など中期後葉になると遺跡数は多くなる。新田原遺跡では南九州特有の住居形態である、いわゆる花弁状間仕切り住居が検出されている。また、宮ノ東遺跡と同様に矢羽根透かしを有する高壺や凹線文の壺の存在は、瀬戸内地域との活発な交流を物語っている。遺跡の立地は台地上が多いが、鬼付女西遺跡は、鬼付女川左岸の砂丘上に位置している。後期から終末期の集落遺跡は、向原第1・西畦原第1遺跡等の中期後葉から継続するものと、後期から始まる銀代ヶ迫・尾小原遺跡が挙げられる。向原第1遺跡からは、

方形プランの堅穴建物6軒・土坑10基が調査され、うち2軒が焼失建物である。鉄鏃や三角形鉄片などが出土していることから、鉄器を製作していた可能性がある。後期後半の代表的な集団墓地として川床遺跡があり、古墳時代前期にかけて周溝墓や木棺墓・土壙墓等195基が検出された。鉄鏃・素環頭大刀・鉄斧等、豊富な鉄製利器が副葬されている。下川床遺跡（1991年の新富町教育委員会における調査時は湯之宮遺跡C地区）では、弥生時代後期の堅穴建物跡1軒を検出し、堅穴建物跡からはほぼ完形の壺が出土している。

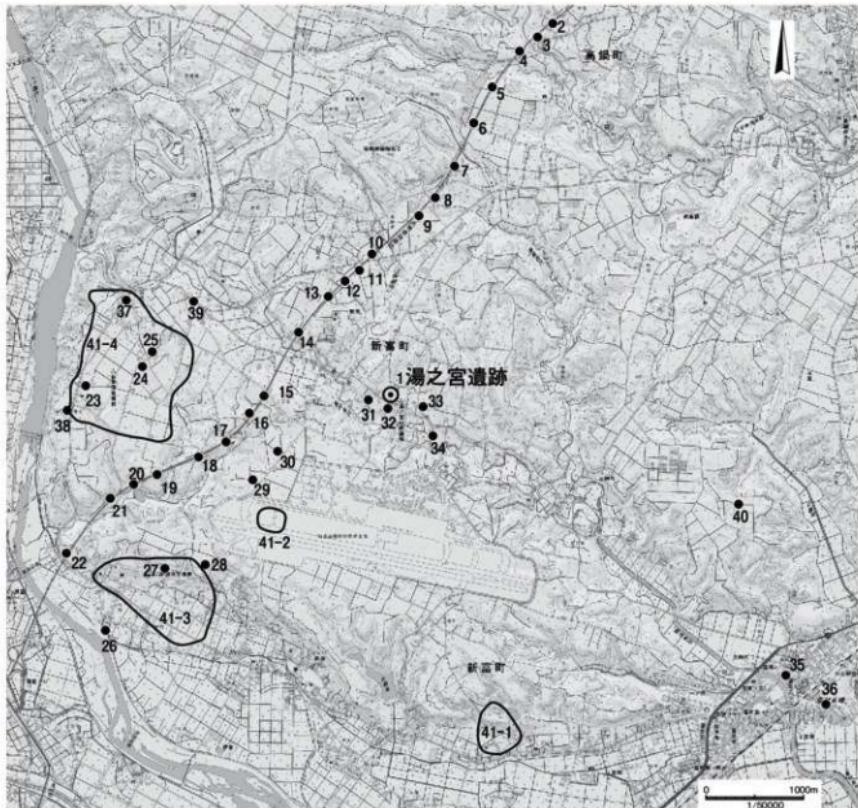
### 古墳時代

湯之宮遺跡周辺では、国指定特別史跡西都原古墳群（西都市）と国指定史跡生目古墳群（宮崎市）と並び宮崎県を代表する大古墳群である国指定史跡新田原古墳群が町内の西側を中心に広がっている。1944年の史跡指定では新田原古墳群として一括されたが、分布や地形上の区分から本来は東から塚原古墳群・石船古墳群・山之坊古墳群・祇園原古墳群と4つの別個の古墳群と捉えられている（新富町教育委員会2021）。広大な畑の中に、百足塚古墳（新田原第58号墳）や水神塚古墳（第56号墳）などの前方後円墳をはじめ、円墳や方墳が点在し、総数は207基と県内でも2番目の規模となっている。百足塚古墳からは、さまざまな人物埴輪や鶴や鹿などの動物埴輪、器材埴輪や家形埴輪などの様々な形象埴輪が出土している。

### 古代～中世

湯之宮遺跡周辺では、上園遺跡（新富町1986～1988年）の調査によって、奈良時代の竈付き堅穴建物跡6軒、平安時代の堅穴建物跡3軒および掘立柱建物跡17棟分、土壙墓2基、中世の溝状造構38条、石積み造構1基、土坑4基が検出された。遺物としては、奈良時代の墨書きを伴う須恵器・土師器、平安時代の須恵器・土師器・布痕土器などが出土している。須田貫遺跡（1991年の新富町教育委員会における調査時は湯之宮遺跡A・B地区）では、中世（13世紀～17世紀）と思われる掘立柱建物1棟、及び同時期と思われる小穴群約50基、土壙墓1基、溝状造構7条等の造構が検出された。遺物は備前大窓片・古瀬戸壺の破片、ヘラ切り底の土師器片が出土している。また、湯之宮遺跡（1991年の新富町教育委員会における調査時は湯之宮遺跡D地区）では南北に時期不明の溝状造構1が走り、それに直交し、切る形で新しい溝状造構2が検出され、南側でも溝状造構1に対して同じような形で溝状造構3が検出されている。出土した遺物は、耕作土廃土中で採集された土師片と近代の陶器片のみであった。

湯之宮遺跡に隣接して国指定天然記念物「湯之宮座論梅」があり、その南側には近世に実知寺のあった湯之宮神社が鎮座している。建久八年（1197年）の「日向国団田帳写」によると湯宮13丁は安楽寺領とするとの記載が見られる。安楽寺は、現在の福岡県太宰府市にあった寺院で、首原道真の廟所である。この安楽寺領を管理していた地頭が、島津莊の祖とされる平季基の子息ではないかと推定されている。また、この人物が宮崎平野の八条女院領の地頭としても名前が見えることから、有力な人物であったと考えられ、湯之宮周辺が古代から中世にかけて特異な位置にあったと考えられる。



1 湯之宮遺跡	2 唐木戸第3遺跡	3 唐木戸第4遺跡	4 小並第1遺跡
5 牧内第1遺跡	6 牧内第2遺跡	7 音明寺第1遺跡	8 音明寺第2遺跡
9 東畦原第1遺跡	10 東畦原第2遺跡	11 東畦原第3遺跡	12 西畦原第1遺跡
13 西畦原第2遺跡	14 上新開遺跡	15 勘大寺遺跡	16 永牟田第1遺跡
17 永牟田第2遺跡	18 尾小原遺跡	19 向原第1遺跡	20 藤山第1遺跡
21 藤山第2遺跡	22 宮ノ東遺跡	23 潟戸口遺跡	24 水神塚古墳
25 百足塚古墳	26 竹洞C遺跡	27 銀代ヶ淵遺跡	28 七又木遺跡
29 新田原第1遺跡	30 新田原第2遺跡	31 新田瀬之口遺跡	32 須田貫遺跡
33 湯牟田遺跡	34 下川床遺跡	35 園田遺跡	36 鬼付女西遺跡
37 祇園原遺跡	38 春日遺跡	39 川床遺跡	40 上薙遺跡
41 新田原古墳群 (41-1 塚原古墳群 41-2 石船古墳群 41-3 山之坊古墳群 41-4 祇園原古墳群)			
〔2~22は東九州自動車道建設に伴う発掘調査〕			

第1図 湯之宮遺跡周辺の主要な遺跡分布図



1 湯之宮遺跡

4 湯牟田遺跡

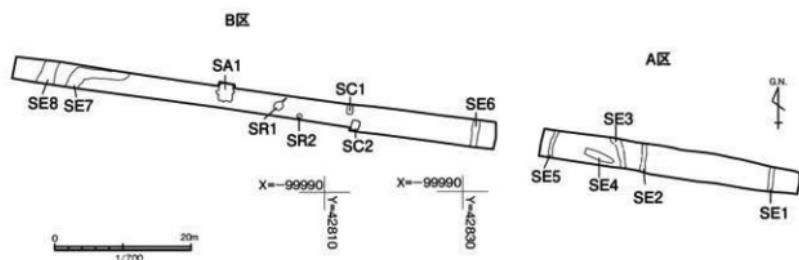
2 新田瀬之口遺跡

5 下川床遺跡

3 須田貫遺跡

\* 網掛け部分は新富町教育委員会による  
発掘調査(1991年)の箇所を示す。

第2図 周辺地形図と遺跡分布図



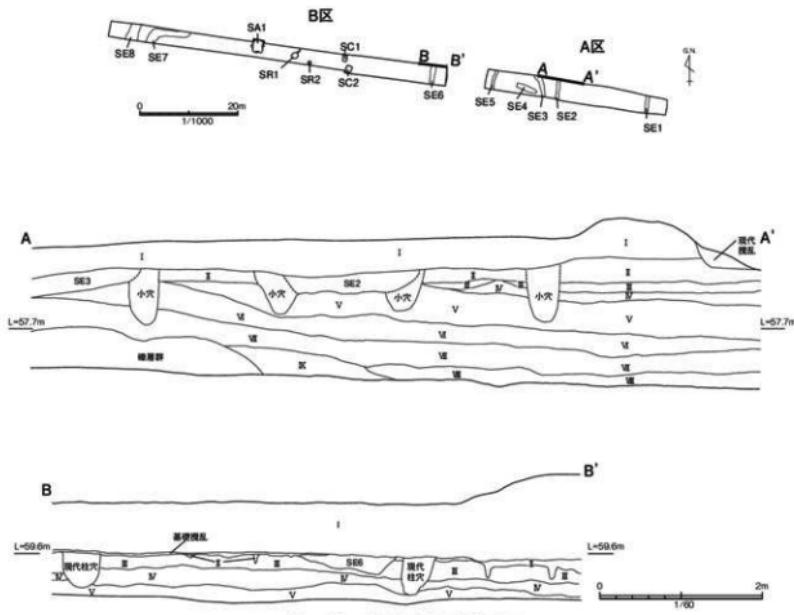
第3図 調査区全体図

### 第Ⅲ章 調査の成果

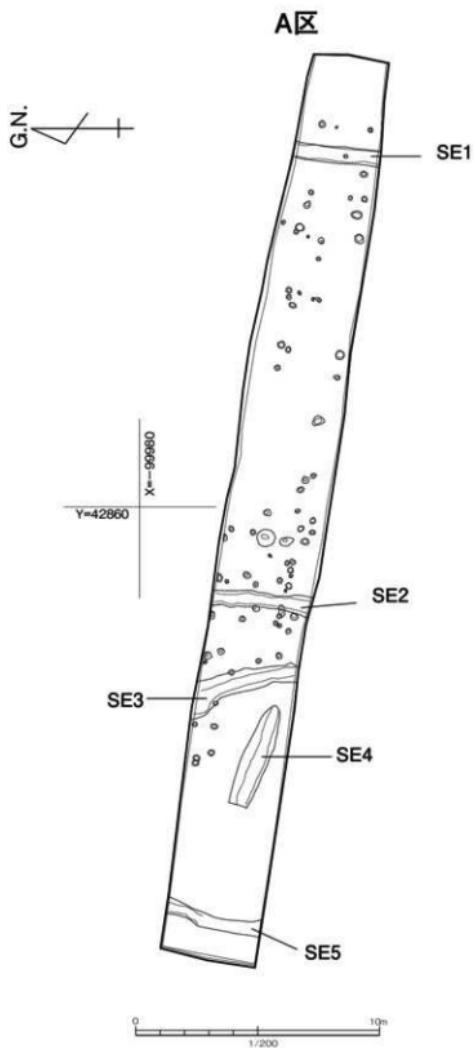
#### 第1節 基本層序

調査対象地は、湯之宮地区を東西に走る県道川床日向新富停車場線の北側に隣接する。幅約2.8m～4.1m、長さ約115mの狭小な範囲であり、宅地・耕作地として利用されていた。現地表面の標高は約58m～60mで、整地され比較的平坦であった。調査区全体で、鍵層である鬼界アカホヤ火山灰（Ⅲ層）が確認できたが、A区ではⅡ層に遺物をほとんど確認できず、B区ではⅡ層の残存が少なかったことから、Ⅲ層上面で遺構検出した。主な基本層序は下記に示すとおりである。

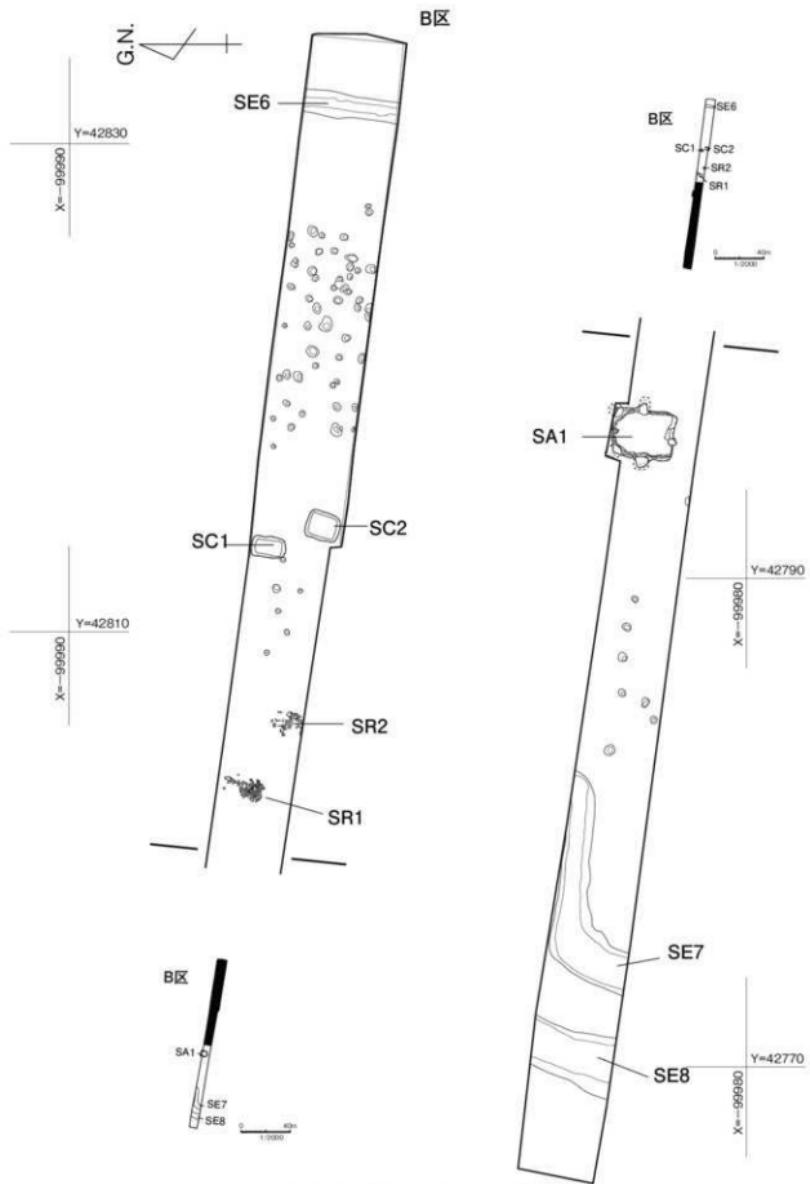
- I層 表土（耕作土）灰褐色土（Hue7.5YR4/2）
- II層 黒色土（Hue7.5YR2/1）【遺物包含層】
- III層 鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、約7,300年前）
- IV層 黒褐色土（Hue7.5YR3/2）
- V層 暗褐色土（Hue7.5YR3/4）【遺物包含層】
- VI層 暗褐色土（Hue7.5YR3/3）
- VII層 褐色土（Hue7.5YR4/3）小林軽石を含む
- VIII層 黄褐色土（Hue10YR5/8）
- IX層 黄褐色土（Hue7.5YR5/8）（段丘縁を多く含む）



第4図 調査区土層断面図



第5図 調査区（A区）全体図



第6図 調査区（B区）全体図

## 第2節 遺構及び出土遺物の概要

### (1) 遺構

中世の火処跡2基、弥生時代後期の堅穴建物跡1軒、時期不明の土坑2基、溝状遺構8条、小穴160基が検出された。調査区自体は狭いが、比較的多くの遺構が検出されたことや過去の発掘調査の内容等から、周囲には多くの遺跡が展開しているものと考えられる。

### (2) 遺物

土器類のうちの堅穴建物跡内から弥生土器片が出土し、すべて3次元座標を与えて取上げた。火処跡からは、東播系須恵器や土師器片が出土した。また、溝状遺構からは瓦質土器、瓦が出土した。

石器はA区西側の下層確認によってV層から、角錐状石器、石鎌が出土した。堅穴建物跡内からは線刻ある磐石製品が出土した。その他にも、台石、磨石、敲石が出土した。

金属製品としては、火処跡から鉄滓が、包含層から銭貨が出土した。

## 第3節 中世の遺構と遺物

### 1 概要

中世の遺構としては、火処跡2基が検出された。検出された遺構内からは、東播系須恵器、鉄滓、中世土師器が出土した。

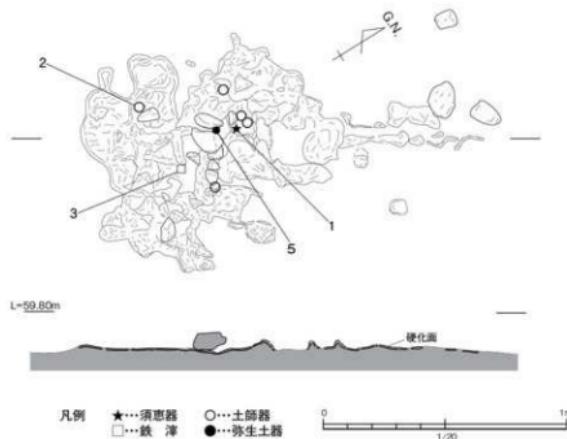
### 2 遺構

#### (1) 1号火処跡 (SR1) (第7図)

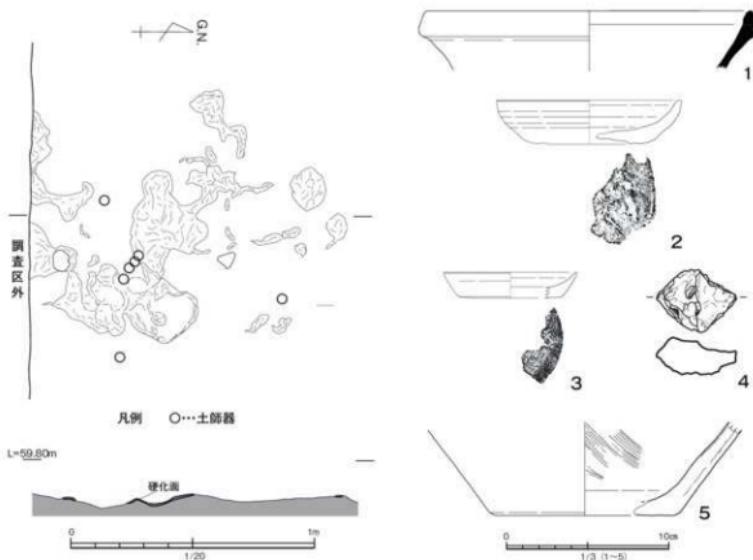
B区中央部東側で検出した。長軸1.6m、短軸1mで掘り込みはなく、底面は平坦である。強い被熱により、底面の土壤は酸化して赤褐色になり、硬化している。北東側に送風口と思われる細長い酸化した土壤が見られる。遺構中央部より鉄滓が出土した。酸化した土壤をふるいにかけたが、鍛造鉄片等は確認できなかった。東播系須恵器が床面近くで出土しており、遺構の時期（13世紀頃）決定の根拠とした。1は東播系須恵器のこね鉢である。口縁部は直線的に立ち上がる。2は土師器の杯である。体部は内済しながら立ち上がり、口縁部は丸みを帯びる。推定底径7.6cmのヘラ切り底で、内外面に回転などを施す。3は土師器の小皿の口縁部から底部にかけてある。内外面に回転ナデを施す。4は鉄滓で長さ3.9cm、重さ48.5gを測る。5は弥生土器の壺で胴部から底部である。SR1直上のⅡ層から出土した土器片と接合できたため、混ざりこみと考えられる。

#### (2) 2号火処跡 (SR2) (第8図)

1号火処跡南東側より検出した。はっきりとした形が残存していないが、直径1mほどの大きさで、北側に送風口と思われる細長い土壤を確認できる。掘り込みはなく、平坦な底面の土が酸化して赤褐色になり、硬化している。1号火処跡と同じような土師器の細片が7点出土したことから、同一時期の遺構と考えられる。



第7図 1号火跡 (SR 1) 実測図



第8図 2号火跡 (SR 2) 実測図

第9図 1号火跡出土遺物

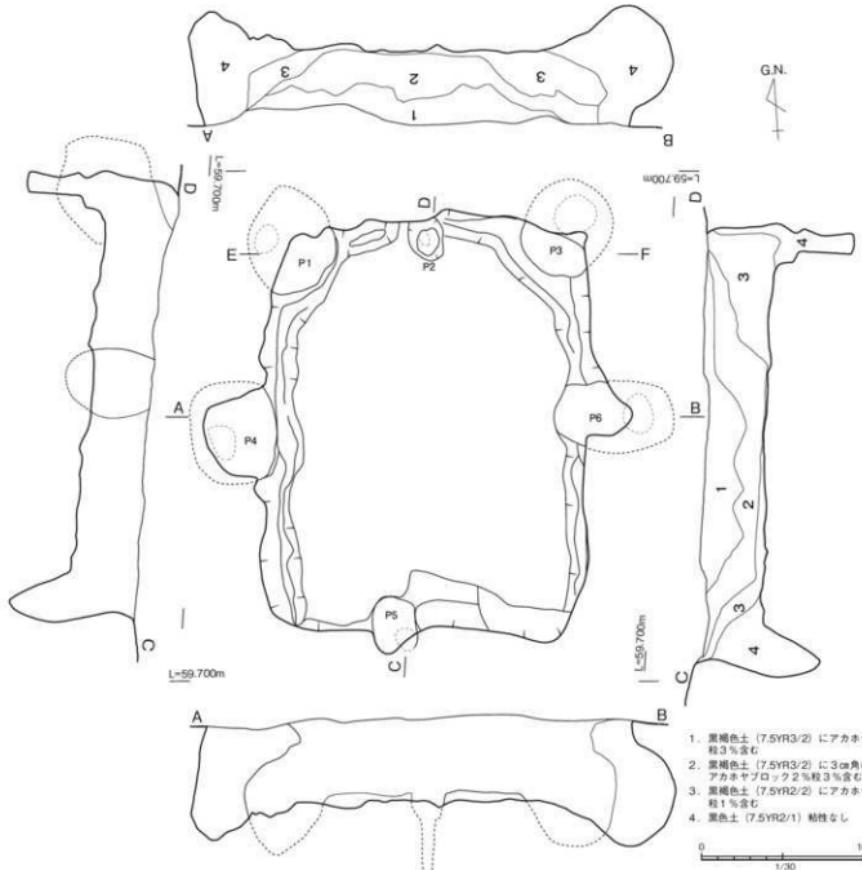
## 第4節 弥生時代の遺構と遺物

### 1 概要

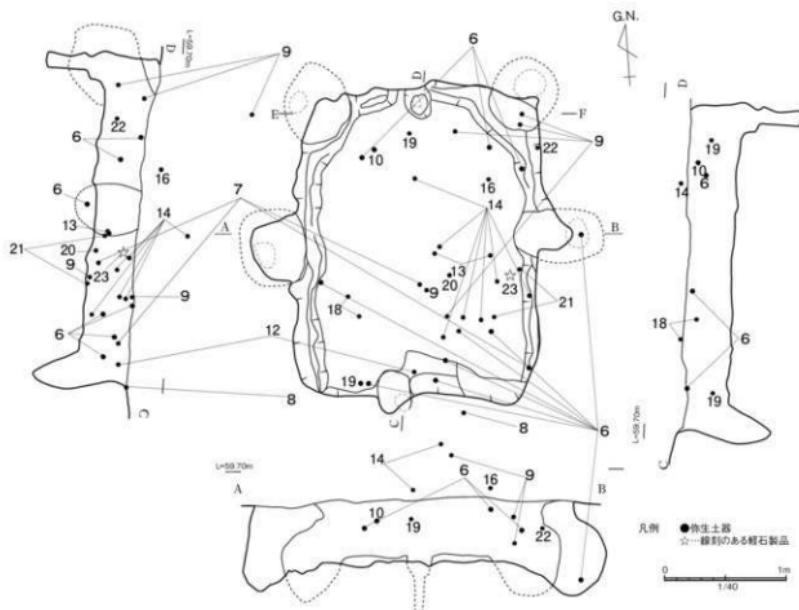
弥生時代後期の遺構としては、Ⅲ層上面より竪穴建物跡1軒が検出された。同遺構からは、弥生時代後期の土器片157点、線刻ある軽石製品1点が出土した。

#### (1) 1号竪穴建物跡（第10図～第11図）

B区中央部Ⅲ層上面で検出した。方形部分の規模は、縦2.7m×横2m、中央部の最深部は約50cmを測る。南北辺の中央部に柱穴をもち、北辺柱穴（P2）の深さが床面より約50cm、南辺柱穴（P5）が検出面から約75cmである。北西角（P1）、北東角（P3）、東辺中央（P4）、西辺中央（P6）の4箇所には、奥行40～50cm、最大幅45cm～60cm、深さ30cm～35cmの楕円形を呈する穴を検出した。



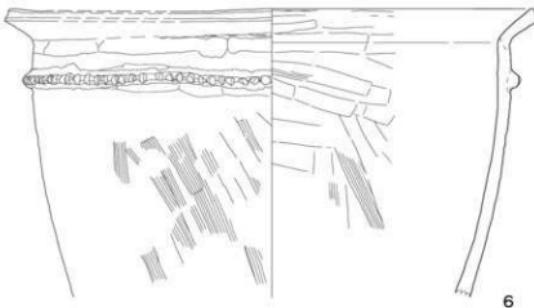
第10図 1号竪穴建物跡（SA 1）実測図



第11図 1号竪穴建物跡 (SA 1) 遺物分布図

下部が斜めに広がっていることから、貯蔵用の穴の可能性が高い。北東角、北西角の穴からは、3~4cm角の炭化材が大量に検出された。炭化材について放射性炭素年代測定を行った結果、堆積状況に整合的なデータが得られた（第Ⅳ章参照）。壁は床面に対してほとんど垂直に立ち、南辺以外の邊には5~10cm幅の壁帶溝がめぐる。埋土は黒色系粘土質で4層に分けられる。レンズ状に堆積しており、自然に埋没していったと考えられる。埋土中からは、弥生土器片157点、軽石製品1点が出土した。そのうち19点を国化する（第12・13図）。

6~22は弥生土器である。6~8は中溝式土器である。6、7は口縁部から胴部、8は口縁部から頸部である。口縁部がくの字に外反し、口縁下には貼り付けによる刻み目突帯がめぐり、斜め方向のナデが胴部には施される。9は甕の胴部から底部である。胴部の外面に煤が付着し、一部黒斑が残る。底部径は7.9cmを測り、円周にはナデが施され、下面是黒変する。10~13は甕である。10~12は甕の口縁部から頸部である。内外面にナデが施され、11には外面に煤が認められる。12は内外面の一部に黒斑を有する。13は口縁部から胴部で内外面にナデが施され、外面には指頭痕が残る。14~21は壺である。14は胴部で、貼付突帯文が施される。15は胴部から底部で内面に縱方向の強い工具痕が施される。16は口縁付近である。内外面にナデが施される。17は頸部から胴部である。内外面にナデが施される。18は胴部である。内外面に横方向のナデが施され、一部に黒斑を有する。19は頸部から肩部である。外面に縱方向の、内面に横方向のナデが施される。20は貼付突帯部分である。21は口縁部で内外面にナデが施される。22は高坏の口縁部で、凹線文が施される。23は線刻ある軽石製品である。一部に欠損がみられるが、梢円形で中央に縱に線刻が1条ある。

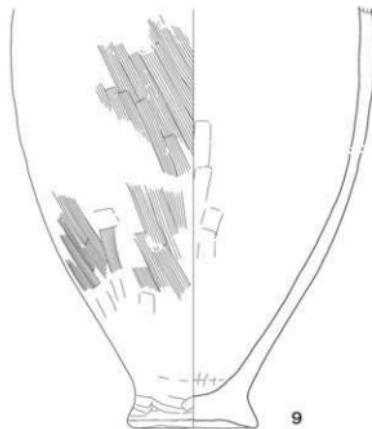


6



7

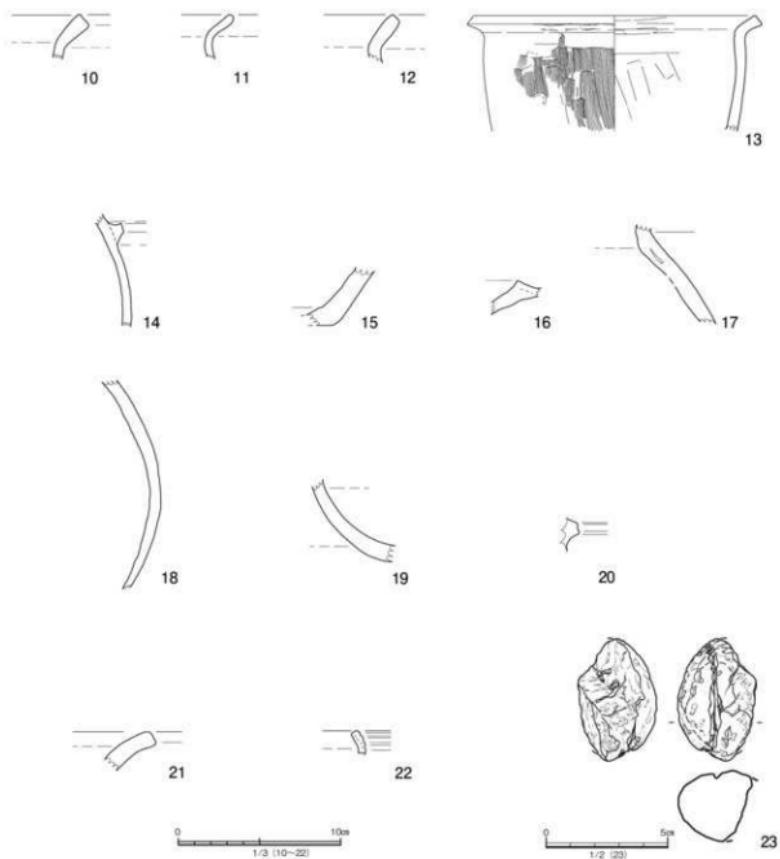
8



9



第12図 1号竪穴建物跡出土遺物実測図①



第13図 1号竖穴建物跡出土遺物実測図②

## 第5節 時期不明の遺構

### 1 概要

土層断面から明確な掘込みの上端を確認できない、出土遺物がほとんど検出されない等の理由から、土坑2基、溝状遺構8条、小穴160基を時期不明の遺構とした。各遺構から出土した遺物は、図化に耐えられるものを掲載する（第17図）。

### 2 遺構

#### （1）1号土坑（SC1）（第14図）

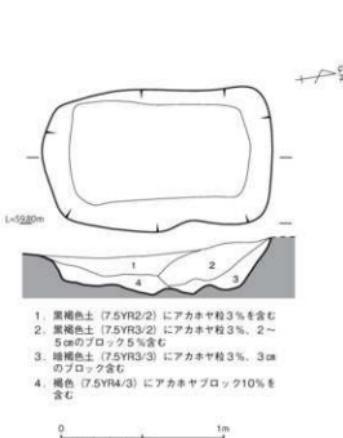
1号土坑（SC1）は、B区東側で検出された。平面はやや不整な長方形である。上端で、長軸1.4m、短軸0.9m、深さは0.27mである。埋土は、黒褐色土を主として、アカホヤブロック、アカホヤ下の褐色ロームのバミスを含む。遺物は出土していない。

#### （2）2号土坑（SC2）（第15図）

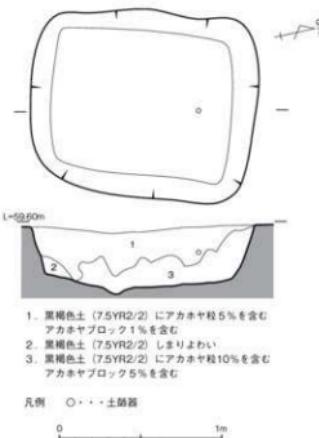
2号土坑（SC2）は、1号土坑の南側で検出された。平面は方形で、上端で長軸1.4m、短軸1.15m、深さは0.43mを測る。埋土は黒褐色土を主とし、10cm程度のアカホヤブロックが混ざる。1層中から土師器小片が一つ出土したが、流れ込みの可能性が高い。

#### （3）7号溝状遺構（SE7）（第16図）

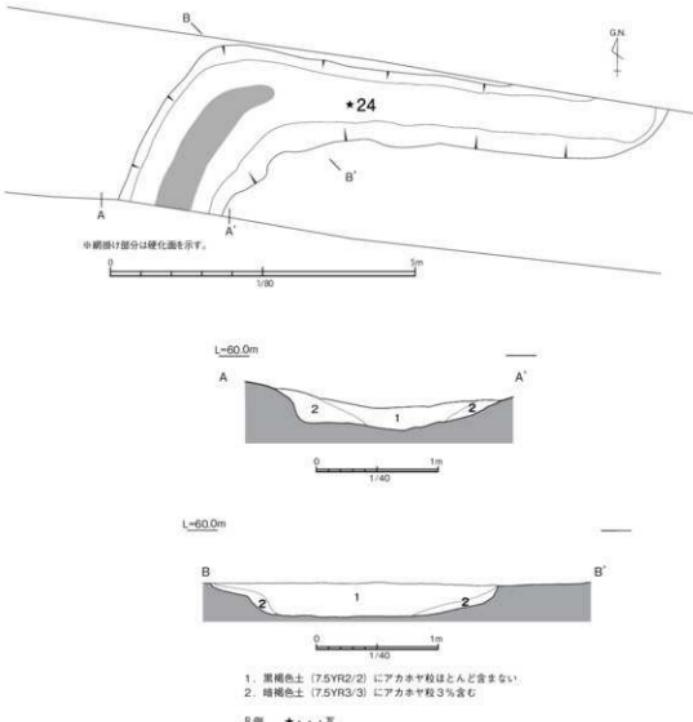
7号溝状遺構（SE7）は、B区西側で検出した。部分的な検出であり全体像は不明であるが、調査区内で確認できた遺構の規模は、全長約8.4m、最大幅2.1m、深さ約30cmから約10cmである。北東壁より西に向かい、南東に屈曲する。全体像が見えないため用途及び年代については不明ながら、床面が硬化している部分もあり、自然流路ではなく何らかの人為的な遺構と判断した。遺物は瓦が1点である。24は浅黄色の胎土で作られた丸瓦である。SE7の屈曲部近くの上面より出土した。



第14図 1号土坑（SC1）実測図



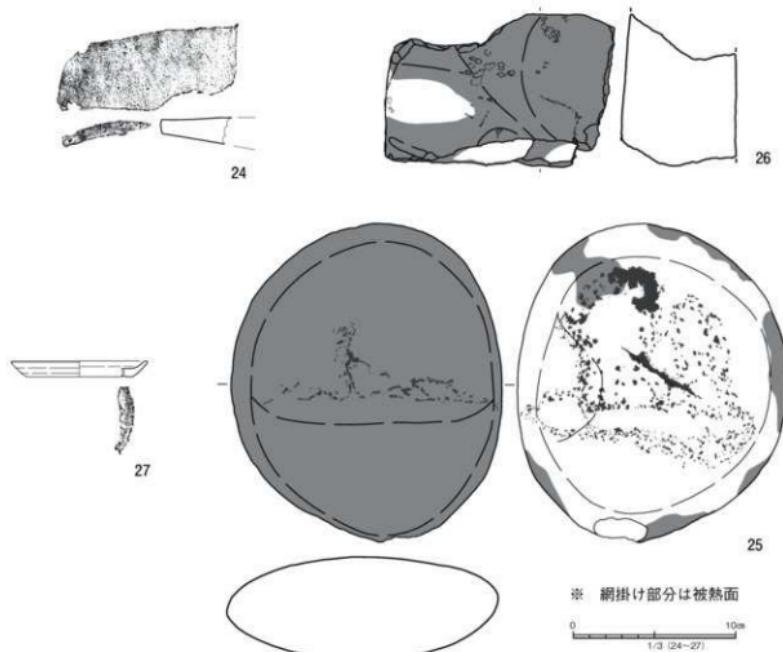
第15図 2号土坑（SC2）実測図



第16図 7号溝状遺構 (SE 7) 実測図

## (4) 小穴 (第5図・6図)

湯之宮遺跡では、調査区の全体に160基の小穴が確認された。小穴は径約0.1mから0.7mで検出面からの深さは約0.1mから0.6mである。調査区の狭さ等に起因して、掘立柱建物や構などを認定することは困難であった。遺物は、台石2点、土師器1点、磁器1点が出土し、このうち3点を國化掲載した(第17図)。25・26は砂岩の台石である。25は砂岩製の円形の台石で、重量は2.6kgを測る。穴径とほぼ同じ大きさで床面より検出されたことから、根固め石等に転用されたと考えられる。26は砂岩製の台石で大きく欠損がみられる。煤の付着も認められ、被熱によって欠損が生じた可能性も否定できない。27は土師器の小皿で口縁部から底部である。



第17図 時期不明の遺構に伴う遺物

## 第6節 包含層出土遺物

### 1 概要

遺構に伴わないⅡ層およびV層出土遺物を、包含層出土遺物として図化掲載する（第18図・19図）。

### 2 Ⅱ層遺物

#### (1) 土器・陶磁器等（28～38）

##### 瓦（28）

28は、焼化された京花軒瓦で、唐草文様が施される。近世以降のものと考えられる。

##### 磁器（29・30）

29・30は近世の肥前系磁器である。29は染付椀で、30は染付椀蓋である。内外面に釉が施される。

##### 輸入磁器（31～34）

31～34は龍泉窯系青磁の碗である。31・32は口縁部、33は胴部、34は高台である。31～33はSR1直上から、34はA区東側より出土している。

**瓦質土器（35）**

35は器種不明の胴部から底部付近である。外面に多方向の工具ナデ後に一部ナデが、内面に横・斜め方向の工具ナデ後に一部ナデが施される。

**中世土師器（36～38）**

36・37は小皿の口縁部から底部である。36は推定底径7.4cmのヘラ切り底で、内外面に回転ナデを施す。37は推定底径5.8cmの糸切り底で、内外面に回転ナデを施す。38は器種不明の底部である。推定底径5.3cmのヘラ切り底で、内外面に回転ナデを施し、内面の一部に施釉が施される。

**(2) 石器****磨石（39）**

39は砂岩製で、長さ12.5cm、幅11.7cm、厚さ3.3cmの円形で重量697.9gを測る。正面と裏面に平坦な面を持ち、右側面に磨面が認められる。

**敲石（40）**

40は砂岩製で、長さ10.6cm、幅6.95cm、厚さ4.6cm、重量471.5gを測り、右側縁下部に敲打痕が認められる。

**台石（41）**

41は砂岩製で、長さ27.4cm、幅15.9cm、厚さ7.5cm、重量は4.2kgを測る。中央右側から下部にかけて欠損している。表面下部には、被熱によって生じた跡が残る。金床石の可能性も考えられる。

**(3) 銭貨****銭貨（42・43）**

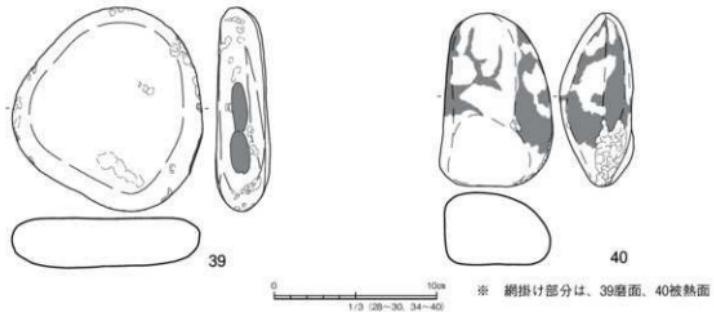
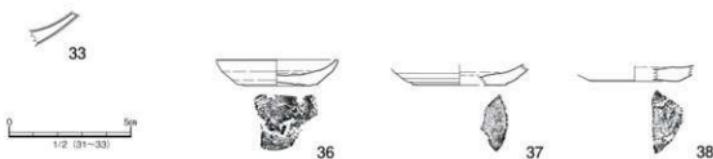
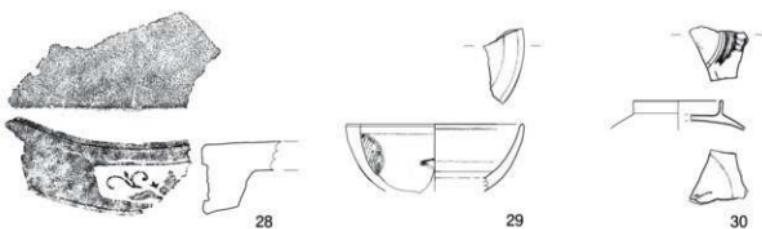
42は洪武通宝である。表に「洪武通宝」の文字が見られる。鋳化が著しく、裏には「治」と思われる文字の一部が残る。綠青とともに鉄鋳も顕著であり、材質に銅や鉛の他に鉄が含まれると思われる。やや小ぶりで、磁性をもつといった加治木銭の特徴と一致する。43は江戸時代に広く流通した寛永通宝である。

**3 V層出土遺物****角錐状石器（44）**

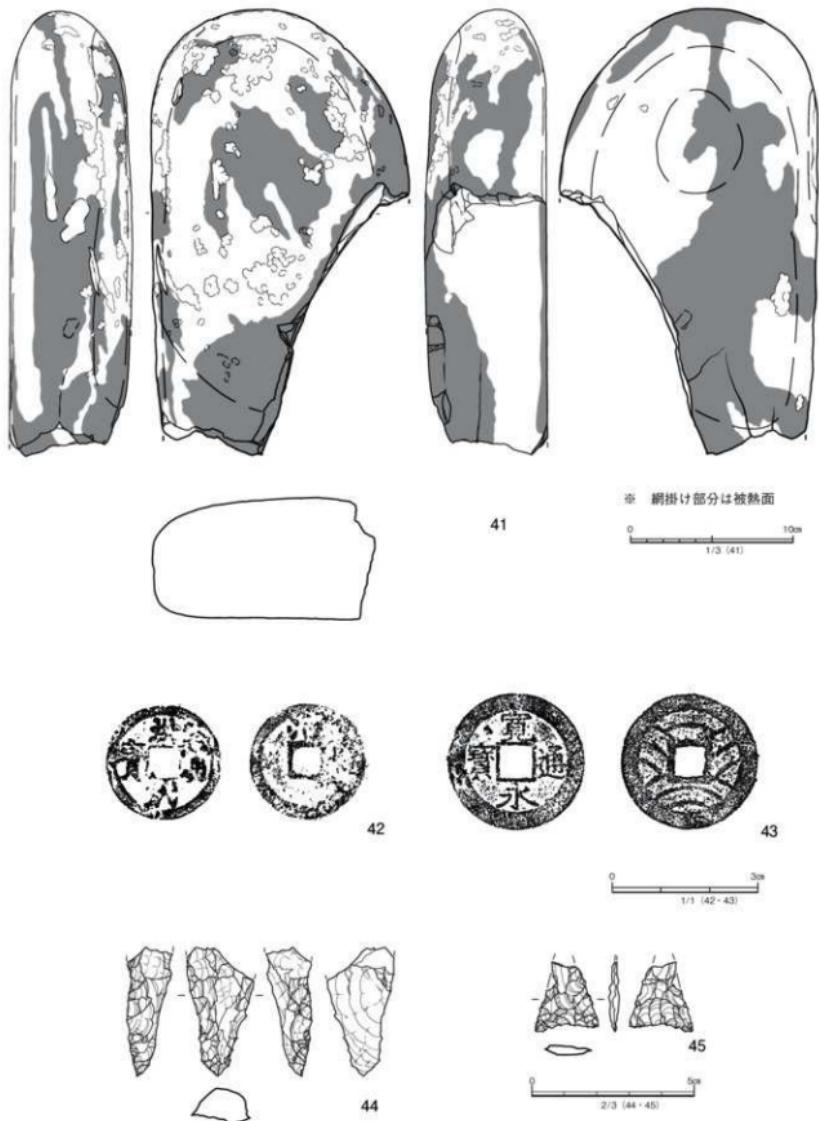
44は日東系黒曜石製である。長さ3.95cm、重量7.1gを測る。表裏両面から調整ののち、裏面から左右両側面に二次加工を施し、刃部を作る。基部は欠損している。

**石鎌（45）**

45はチャート製である。長さ2.1cm、重量1.0gを測る。刃部の上部を欠損する。全体に荒く調整を施し、薄くつくる。基部にほとんど抉りは認められず、二等辺三角形に近い平面形であったと推測される。



第18図 包含層出土遺物①



第19図 包含層出土遺物②

第1表 土器觀察表

番号	種類	部位	出土位置 層・遺構	手法・測量・文様ほか		色調	地土の特徴	備考	
				外観	内面				
1	須弥器	こね鉢	口縁～脚部	SR1	四輪ナデ	凹輪ナデ、段落を斜め方 向にナデ	灰青 2.5Y 7/2	灰青 2.5Y 7/2	白色粒多(3mm以下)、灰色粒(4mm以 上)、白色粒少
2	土器器	糸	口縁～底部	SR1	四輪ナデ、ナデ	凹輪ナデ	10YR 8/4	10YR 8/5	白色粒多(2mm以下)、白色粒少
3	土器器	小糸	口縁～底部	SR1	四輪ナデ、底面ナデ	凹輪ナデ	7.5YR 7/6	7.5YR 7/6	白色粒(2mm以下)、白色粒少(1mm以 上)
5	弔生土器	巻	明治～底部	SR1	寔方向のナデ、風化斑跡	針方向のナデ、変更	輪 2.5Y 4/2	灰青 2.5Y 3/2	白色粒多(5mm以下)、白色粒少(3mm以 上)、白色透明粒少(2mm以下)
6	弔生土器	巻	口縁～脚部	SA1	口縁のいじり、横ナデ 後縁の棒ナデ、貼付突起 変更上のナデ、斜向のナデ	横方向のナデ、縦方向の ナデ	輪 5YR 6/6	5YR 6/6 5YR 6/6 10YR 4/1	白色粒多(4mm以下)、白色粒少(4mm以 上)、白色粒少(3mm以下)
7	弔生土器	巻	口縁～脚部	SA1	ナデ、横ナデ、捺めの棒 ナデ、貼付突起、変更上 のナデ、斜向のナデ	横ナデ(風化らしい) 横方向のナデ、斜向のナ デ、貼付突起、変更上のナ デ	輪 5YR 6/5	10YR 7/0	白色粒多(4mm以下)、白色粒少(3mm以 上)、白色粒少(1mm以下)
8	弔生土器	巻	口縁～脚部	SA1	横ナデ、寔方向のナデ、 貼付突起、変更上のナ デ	横方向のナデ、斜向のナ デ、寔方向の 横の工具痕	浅青 10YR 8/4	浅青 10YR 8/4	白色粒多(3mm以下)、白色粒少(3mm以 上)、白色粒少(1mm以下)
9	弔生土器	巻	脚部～底部	SA1	寔・斜方向のナデ、工具 ナデ、化物付痕、変更	ナデ、化物付痕、変更	輪 7.5YR 6/6 灰青 10YR 5/2	灰青 2.5Y 5/2	白色粒多(4mm以下)、白色粒少(3mm以 上)、白色粒少(2mm以下)
10	弔生土器	巻	口縁～脚部	SA1	ナデ、風化してくぼみ不 規則の棒ナデ	ナデ	灰青 10YR 5/2	灰青 2.5Y 5/2	白色粒多(2mm以下)、白色粒少(2mm以 上)、透明光沢粒少(1mm以下)
11	弔生土器	巻	口縁～底部	SA1	ナデ、スス付痕	ナデ、全体的に変更	浅青 2.5Y 4/2	2.5Y 4/1	白色粒多(3mm以下)、白色粒少(2mm以 上)
12	弔生土器	巻	口縁～底部	SA1	ナデ、面あわせ後ナデ、 スス付痕	面あわせ後ナデ	灰青 10YR 7/4	10YR 7/4	白色粒多(3mm以下)、白色粒少(3mm以 上)、白色粒少(1mm以下)
13	弔生土器	巻	口縁～脚部	SA1	ナデ・斜方向のナデ、 横ナデ、斜・寔・斜方向のナ デ	横ナデ、斜・寔・斜方向のナ デ	浅青 2.5Y 5/2	2.5Y 5/2	白色粒多(5mm以下)、白色粒少(3mm以 上)、白色粒少(2mm以下)
14	弔生土器	巻	脚部	SA1	横・斜方向のナデ、 変更、風化気味、横ナデ の工具痕	横方向の工具痕、風化氣 味のナデ	灰青 2.5Y 3/2	灰青 2.5Y 4/2	白色粒多(2mm以下)、白色粒少(2mm以 上)、白色粒少(2mm以下)
15	弔生土器	巻	脚部～底部	SA1	寔方向のナデ	ナデ、寔方向の斜工具痕	輪 2.5Y 4/2	2.5Y 4/2	白色粒多(3mm以下)、白色粒少(3mm以 上)
16	弔生土器	巻	口縁	SA1	ナデ、面あわせ後ナデ	ナデ	7.5YR 6/6	10YR 6/4	白色粒多(5mm以下)、白色粒少(2mm以 上)、白色粒少(1mm以下)
17	弔生土器	巻	脚部～脚部	SA1	横ナデ、寔方向の工具痕 横方向のナデ	横ナデ、寔方向の工具痕 横方向のナデ	浅青 10YR 5/4	2.5Y 7/2	白色粒多(4mm以下)、白色粒少(2mm以 上)、透明光沢粒少(1mm以下)
18	弔生土器	巻	脚部	SA1	横・斜方向のナデ、ス ス付痕	横・斜方向の工具痕と スス付痕	浅青 10YR 8/3	2.5Y 7/3	白色粒多(4mm以下)、白色粒少(2mm以 上)、透明光沢粒少(1mm以下)
19	弔生土器	巻	脚部～底部	SA1	寔方向のナデ	横ナデ	浅青 10YR 8/4	10YR 8/4	白色粒多(2mm以下)、白色粒少(1mm以 上)
20	弔生土器	巻	脚部	SA1	ナデによるいじり、貼付突 起等ナデ	ナデ	浅青 2.5Y 8/3	2.5Y 8/3	白色粒多(3mm以下)、白色粒少(3mm以 上)
21	弔生土器	巻	口縁	SA1	ナデ、横ナデ	横ナデ	7.5YR 7/6	7.5YR 7/6	白色粒多(2mm以下)、白色粒少(2mm以 上)、白色粒少(1mm以下)
22	弔生土器	巻	口縁	SA1	出線文、ナデ	ナデ	7.5YR 6/5	7.5YR 6/5	白色粒多(2mm以下)、白色粒少(2mm以 上)
24	瓦	瓦	—	SE7	ナデ、削り	ナデ、削り	浅青 2.5Y 7/3	2.5Y 7/2	白色粒多(4mm以下)、白色粒少(2mm以 上)、透明光沢粒少(1mm以下)
27	土器器	小糸	口縁～脚部	SH94	四輪ナデ	凹輪ナデ	灰青 2.5Y 7/2	灰 (N 5/2)	白色粒多(5mm以下)、白色粒少(1mm以 上)、透明光沢粒少(1mm以下)
28	瓦	瓦片斜瓦	—	三層	ナデ、押し型、削り	ナデ	灰 5YR 6/2	灰 5YR 6/1	白色粒多(3mm以下)、黑色粒少(1mm以 上)、透明光沢粒少(1mm以下)
29	器物	柄	口縁～脚部	三層	施釉	施釉	5YR 6/1 5YR 6/1 5YR 5/1	5YR 6/1 5YR 6/1 5YR 5/1	黑色
30	器物	柄	口縁	三層	施釉	施釉	10YR 6/1 10YR 6/1 10YR 6/1	10YR 6/1 10YR 6/1 10YR 6/1	黑色
31	器物	柄	口縁	三層	施釉	施釉	7.5Y 6/2 7.5Y 5/2	7.5Y 6/2 7.5Y 5/2	黑色
32	器物	柄	口縁	三層	施釉	施釉	5YR 6/2 5YR 6/2	5YR 6/2 5YR 6/2	黑色
33	器物	柄	脚部	三層	施釉	施釉	オリーブグリーン 10YR 6/2	オリーブグリーン 10YR 6/2	黑色
34	器物	柄	高台	三層	施釉	施釉	オリーブグリーン 2.5Y 6/2 2.5Y 7/1	オリーブグリーン 2.5Y 6/2 2.5Y 7/1	黑色
35	瓦質土器	—	脚部～ 脚部前後左右	2層	多方向の工具ナデ後づ き	横・斜方向の工具ナデ後づ き(一部ナデ)	灰青 2.5Y 6/1	灰青 2.5Y 6/1	白色粒多(3mm以下)、白色粒少(3mm以 上)、透明光沢粒少(2mm以下)
36	土器器	小糸	口縁～脚部	三層	四輪ナデ、底面へ切り	凹輪ナデ、底面ナデ	灰青 10YR 6/3	灰青 10YR 6/3	白色粒少(2mm以下)、白色粒少(2mm以 上)
37	土器器	小糸	脚部～ 脚部	三層	四輪ナデ、底面あて切り	凹輪ナデ	灰青 2.5Y 6/3	2.5Y 7/2	白色粒少(2mm以下)、白色粒少(2mm以 上)
38	土器器	—	底部	三層	四輪ナデ、へき切り	凹輪ナデ、施?	にじり・施 10YR 7/3	10YR 7/3	白色粒少(2mm以下)、白色粒少(2mm以 上)

第2表 石器觀察表

番号	種類	石種	遺構・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
4	核子	砂岩	SR1	39.0	49.0	21.0	48.5
42	酒甕	石	—	24.0	24.0	2.0	2.0
43	骨小通子	石	—	28.0	28.0	1.0	4.1

第3表 金属製品觀察表

番号	種類	材質	遺構・層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)
4	核子	金	SR1	196.0	167.0	65.0	260.0

## 第IV章 自然科学分析

(株) 古環境研究センター

### 第1節 自然科学分析の概要

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である（中村、2003）。

### 第2節 放射性炭素年代測定

#### 1 試料と方法

試料は、SA1（弥生時代の住居跡）から採取された炭化材（No.1～No.4）および土器の外面に付着した炭化物（No.5、No.6）の計6点である。表4に試料の詳細および前処理・調整法を示す。測定は加速器質量分析法（AMS法：Accelerator Mass Spectrometry）で行った。

#### 2 測定結果

AMS法によって得られた $^{14}\text{C}$ 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代および曆年代（較正年代）を算出した。表4にこれらの結果を示し、第20図～第21図に各試料の曆年較正結果（較正曲線）、第22図に曆年較正年代マルチプロット図を示す。

##### （1） $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25（‰）に標準化することで同位体分別効果を補正している。

##### （2）放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を使用している。付記した統計誤差（±）は $1\sigma$ （68.2%確率）である。 $^{14}\text{C}$ 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、曆年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない曆年較正年代値を併記した。

##### （3）曆年代（Calendar Years）

放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) 年代を実際の年代値に近づけるために、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動や $^{14}\text{C}$ の半減期の違いを較正している。曆年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な $^{14}\text{C}$ 測定値および福井県木月湖の年縞堆積物データなどにより作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 20、較正プログラムはOxCal 4.4である。

曆年代（較正年代）は、 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅で表し、OxCalの確率法により $2\sigma$ （95.4%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。

( ) 内の%表示は、その範囲内に曆年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

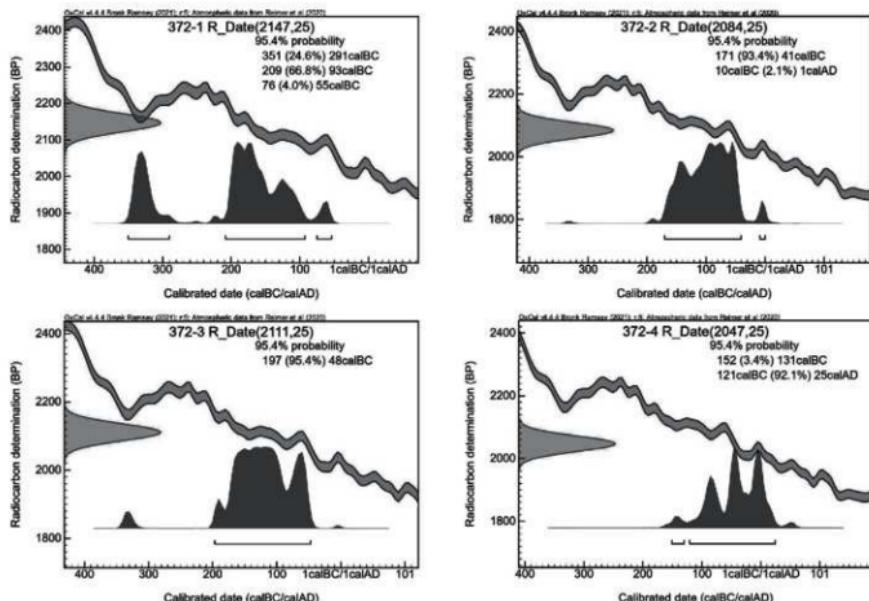
### 3 所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、No.1では $2150 \pm 30$ 年BP（ $2\sigma$ の暦年代でBC 351~291, 209~93, 76~55年）、No.2では $2080 \pm 30$ 年BP（BC 171~41, BC 10~AD 1年）、No.3では $2110 \pm 30$ 年BP（BC 197~48年）、No.4では $2050 \pm 30$ 年BP（BC 152~131, BC 121~AD 25年）、No.5では $2210 \pm 20$ 年BP（BC 372~197年）、No.6では $2100 \pm 20$ 年BP（BC 176~42年）の年代値が得られた。

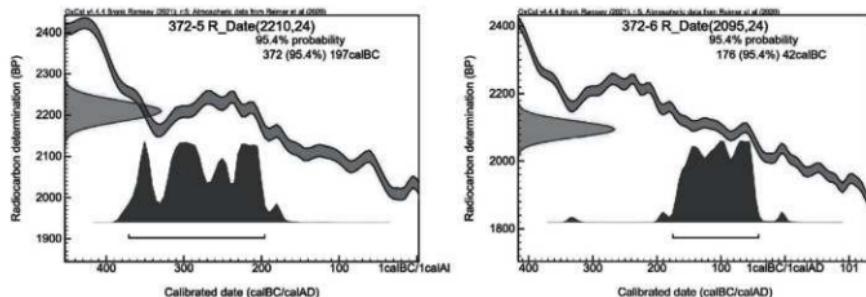
なお、樹木（炭化材）による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、考古学的所見よりも古い年代値となることがある。

第4表 放射性炭素年代測定結果

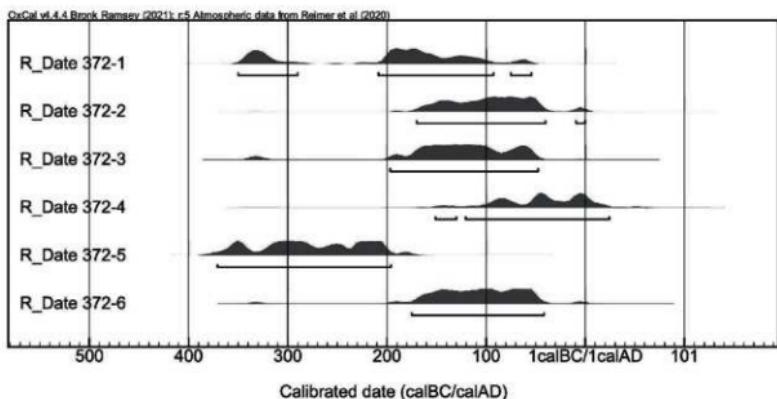
試料 No.	測定No. IAAA-	試料の詳細	種類	前処理 測定法	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	¹⁴C年代 (年BP)	暦年較正用 年代(年BP)	暦年代(較正年代)	
								1 $\sigma$ (68.2%確率)	2 $\sigma$ (95.4%確率)
1	211074	SA 1 内P4	炭化材	AAA処理 AMS法	-22.80 ± 0.17	2150 ± 30	2147 ± 25	cal BC 343-320 cal BC 202-151 cal BC 131-121	(18.0%) (44.8%) (5.4%)
2	211075	SA 1 内P6	炭化材	AAA処理 AMS法	-27.36 ± 0.18	2080 ± 30	2084 ± 25	cal BC 149-138 cal BC 114-49	(10.1%) (58.2%)
3	211076	SA 1 底	炭化材	AAA処理 AMS法	-25.82 ± 0.19	2110 ± 30	2111 ± 25	cal BC 168-97 cal BC 71-57	(57.8%) (10.4%)
4	211077	SA 1 中位	炭化材	AAA処理 AMS法	-23.16 ± 0.22	2050 ± 30	2047 ± 25	cal BC 94-75 cal BC 55-29 cal BC 30-10	(14.0%) (28.0%) (20.0%)
5	211078	SA (PNo.177土器 (第12回7の一部))	土器付骨 炭化物 (外側)	AAA処理 AMS法	-24.62 ± 0.17	2210 ± 20	2210 ± 24	cal BC 356-345 cal BC 318-278 cal BC 256-246 cal BC 233-203	(0.0%) (29.7%) (7.5%) (22.1%)
6	211079	SA 1 内P6土器 (第12回6の一部)	土器付骨 炭化物 (外側)	AAA処理 AMS法	-25.11 ± 0.19	2100 ± 20	2095 ± 24	cal BC 151-129 cal BC 123-89 cal BC 81-53	(17.2%) (27.5%) (23.5%)



第20図 暦年較正結果①



第21図 曆年較正結果②



第22図 曆年較正年代マルチプロット図

## 文献

- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」。日本第四紀学会、p.3-20。
- 中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と曆年代較正。環境考古学マニュアル。同成社、p.301-322。
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon Dates. Radiocarbon, 51(1), p.337-360.
- Paula J Reimer et al. (2020) The Int20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 kBP). Radiocarbon, 62(4), p.725-757.

## 第3節 樹種同定

### 1 方法

以下の手順で樹種同定を行った。

- 1) 試料を洗浄して付着した異物を除去
- 2) 試料を剖析して、木材の基本的三断面（横断面：木口、放射断面：柾目、接線断面：板目）を作成

### 3) 落射顕微鏡(40~1000倍)で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

## 2 結果

表2に同定結果を示し、写真図版に各分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記す。

### 1) クリ *Casuarina crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる單列の同性放射組織型である。

以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。

### 2) コナラ属クスギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が1~数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は單穿孔を示し、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で單列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織を示す。

以上の特徴からコナラ属クスギ節に同定される。コナラ属クスギ節にはクスギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。

### 3) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

中型から大型の道管が1~数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、單列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。

樹種同定の結果、No.1とNo.4はクリ、No.2はコナラ属クスギ節、No.3はコナラ属アカガシ亜属と同定された。

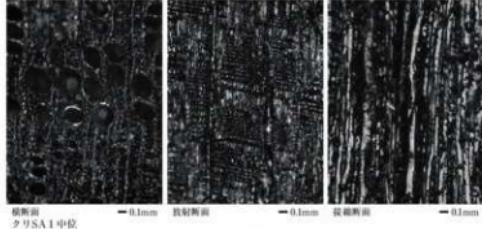
クリは重硬で耐朽性が高く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、柱材などの建築部材としての利用が多い。コナラ属クスギ節は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。また、油分を多く含むため燃料材としても優良である。コナラ属アカガシ亜属は強靭で弾力に富むことから建築部材や農具などに用いられ、火力が強く火持ちが良いことから燃料材(薪炭材)としても優良である。コナラ属アカガシ亜属は照葉樹林の主要構成要素であり、弥生時代以降の西南日本ではとくに農工具に用いられることが多い。

いずれの樹種も、温帯から温帯下部の暖温帯に分布する樹木であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

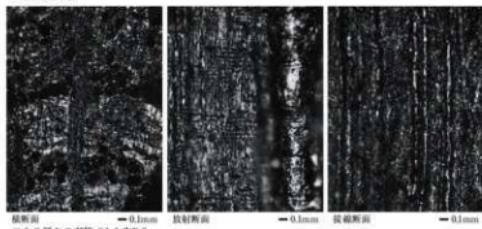
第5表 樹種同定結果

No.	遺構・層準	結果(学名/和名)	
1	SA 1 内P4	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
2	SA 1 内P6	<i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>	コナラ属クスギ節
3	SA 1 底	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
4	SA 1 中位	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ

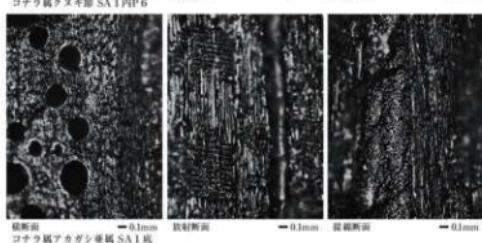
海之宮遺跡の木村



クリ SA 1 中位



コナラ属クスギ節 SA 1 内P6



コナラ属アカガシ亜属 SA 1 底

## 文献

伊東隆夫・山田昌久 (2012) 木の考古学、出土木製品用材データベース。海青社、449p.

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造。文永堂出版、290p.

島地 謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣、296p.

山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 -用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別1号。植生史研究会、242p.

## 第V章 総括

湯之宮遺跡は、鬼付女川沿いに発達する河岸段丘面に立地する。新富町による以前の調査（湯之宮遺跡）では、弥生時代後期の竪穴建物跡や、中世と思われる掘立柱建物などが確認され、弥生時代から中世にかけての遺跡として認識されていた。今回の発掘調査ではアカホヤ火山灰層より上位での遺構・遺物の検出を行い、弥生時代後期以降の調査が中心となった。道路改良工事に伴う限られた面積の調査ではあったが、本章では、確認された遺構・遺物をもとに、発掘調査の成果について簡略ではあるがまとめを述べる。

### 第1節 遺構について

本遺跡では、弥生時代から中世までの遺構が検出された。1号火廻跡からは、東播系須恵器1点、土師器5点、鉄滓1点、弥生土器1点が出土した。土師器はヘラ切り底のものである。縁の羽口は確認できなかったが、被熱により赤化した土壤に風を送り込んだ形状が見られること、鉄滓が出土したことなどから、中世（13世紀頃）の鍛冶炉跡と考えられる。2号火廻跡は、検出された場所が1号火廻跡と近いこと、同じような土師器を多く含むことから時期は同一と思われる。

1号竪穴建物跡からは、弥生土器片157点、軽石製品1点が出土した。弥生時代中期後半から中期末（紀元前1世紀後半から紀元1世紀）に属する中溝2式段階の土器のほか、1点ではあるが、高環口縁部に凹線文が施された弥生土器も出土したことや、自然科学分析の結果をもとに、1号竪穴建物跡は弥生時代中期後半から後期に属すると判断した。遺構の規模は、2.7m×2mとやや小ぶりである。同時期に属する近隣の新田原遺跡では、最大径が8.4mの花弁状や2.9m×4.3mの長方形の竪穴建物跡の床面中央部が方形に1段低くなり、その中に柱穴を2基もつものがみられる。板に削平等によって建物跡の壁と床面の大部分が失われ、床中央の掘り込みのみが残った場合、今回の湯之宮遺跡検出の竪穴建物跡のような状態となる。このことから、1号建物は本来更に大きな規模であった可能性も考えてよかろう。このほか、1号土坑、2号土坑、溝状遺構、小穴群については詳細な時期を判断することは困難であった。また、小穴群について平面分布を検討したが、掘立柱建物や構を認定することが困難であった。

### 第2節 遺物について

土器類は、弥生時代から中世・近世にかけての土器、須恵器、陶磁器が出土した。出土遺物の9割近くが弥生時代中期から後期にかけての弥生土器である。その中でも、くの字に外反する口縁部下に貼り付けによる刻み目突帯を有する3点の土器を、桑畑光博氏の分類する中溝2式（桑畑2000）段階に属すると判断した。その他の弥生土器は、甕8点、壺7点、高環1点であった。小片で出土した弥生土器も、そのほとんどが1号竪穴建物跡内から出土している。

石器は、II層中出土の砂岩製の磨石1点、敲石1点、台石1点について、それぞれ被熱面がみられ、特に被熱面の大きい台石については金床石の可能性も考えられる。

金属製品は鉄滓1点、洪武通宝と寛永通宝の銭貨2点が出土している。瓦や寛永通宝、近世陶磁器等は、かつてあった家屋に關係して出土した可能性も考えられる。

V層中からは、旧石器時代の角錐状石器1点、繩文時代早期以前の石鏃1点が出土した。石材別にみると、角錐状石器は日東系黑曜石、石鏃はチャートである。製品のみが出土し、石器製作に伴う剥片・石核等を伴わないことからは、各時代において狩場としての利用があった可能性もある。

### 第3節 自然科学分析について

1号竪穴建物から採取された炭化材（No.1～No.4）及び炭化物（No.5～No.6）について自然科学分析を行った。分析内容は放射性炭素年代測定（No.1～No.6）及び樹種同定（No.1～No.4）である。

放射性炭素年代測定の結果、No.1では $2150 \pm 30$ 年BP（ $2\sigma$ の曆年代でBC 351～291, 209～93, 76～55年）、No.2では $2080 \pm 30$ 年BP（BC 171～41, BC 10～AD 1年）、No.3では $2110 \pm 30$ 年BP（BC 197～48年）、No.4では $2050 \pm 30$ 年BP（BC 152～131, BC 121～AD 25年）、No.5では $2210 \pm 20$ 年BP（BC 372～197年）、No.6では $2100 \pm 20$ 年BP（BC 176～42年）の結果が得られた。1号竪穴建物の遺物は、出土土器から弥生時代中期後半から後期のものであり、No.1～No.6はおおよそ、その年代観と調和的であると言える。

樹種同定の結果、No.1・No.4はクリ、No.2はコナラ属クヌギ節、No.3はコナラ属アカガシ亜属と同定された。いずれも温帯から温帯下部の暖温帯に分布する樹木であり、遺跡周辺において採取可能であったと考えられる。それぞれの特性を生かし、建築部材や燃料材、器具や農具に用いられたと考えられる。

### 第4節 結語

今回の発掘調査は、鬼付女川河岸段丘面に位置する調査地を対象とし、旧石器時代、縄文時代、弥生時代から中世・近世の遺構・遺物が確認され、長期間にわたる断続的な土地利用のあり方や営みの一端を垣間見ることができた。特に、中溝式土器や瀬戸内系の凹線文土器の出土した弥生時代の竪穴建物跡、東播系須恵器や鉄滓を伴う火廻跡は、以前の新富町による湯之宮遺跡の発掘調査では判然としなかった弥生時代中期後半から中世にかけての生活の広がりについて示す資料となり大きな成果と言える。また、旧石器・縄文時代の遺物出土は、湯之宮遺跡では初見であり注目される。今回の調査成果が、今後の調査・研究の一助になることを期待したい。

### 参考文献

- 新富町 1992 「新富町史 通史編」「新富町史 資料編」
- 新富町教育委員会 1986 「新田原遺跡」「新富町文化財調査報告書」第4集
- 新富町教育委員会 1991 「湯之宮遺跡」「新富町文化財調査報告書」第12集
- 新富町教育委員会 2007 「新富町の埋蔵文化財（改訂版）－新富町遺跡詳細分布調査報告書2－」「新富町文化財調査報告書」第46集
- 新富町教育委員会 2021 「町内遺跡33 令和2年度町内遺跡発掘調査概要報告書 町内遺跡試掘確認調査 新田原56号墳」「新富町文化財調査報告書」第77集
- 柴畠光博 2000 「中溝式系土器の検討」「古文化談義」第45集、九州古文化研究会
- 日本貿易陶磁研究会 1998 「貿易陶磁研究 No.1～No.5」六一書房
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2010 「鶴戸ノ前遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第193集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2014 「岡遺跡（第16次調査）・馬込遺跡第2地点」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第230集





調査区全景（東から）



調査区全景（西から）

図版2



1号竪穴建物跡完掘状況（南西から）



1号竪穴建物跡北側完掘状況（南から）



1号竪穴建物跡東側遺物検出状況（西から）



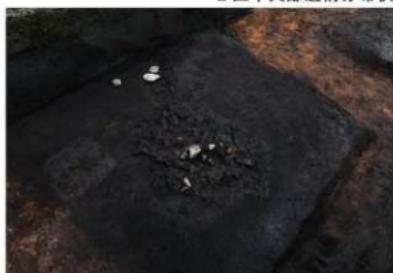
1号竪穴建物跡南側中央部（北から）



1号竪穴建物跡遺物出土状況（東から）



B区中央部遺構分布状況（東から・手前SR2）



1号火跡検出状況（南西から）



2号火跡検出状況（北から）



作業風景



現地説明会

図版 4



SR 1 出土遺物

SA 1 出土遺物①



SA 1 出土遺物②



SA 1 出土遺物③



時期不明の遺構に伴う遺物



包含層出土遺物①



包含層出土遺物②



|



包含層出土遺物④

包含層出土遺物③



## 報 告 書 抄 錄

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第263集

## 湯之宮遺跡

県道川床日向新富停車場線（湯之宮工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
2023年2月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター  
〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地  
TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 愛文社印刷株式会社  
〒880-0921 宮崎市大字本郷南方4045-4  
TEL 0985(77)7277 FAX 0985(63)9559

---



